



ヨーロッパの街角から

愛して結婚したものの…… ～ドイツの離婚事情～

海外で離婚した日本人が無断で子供を連れ帰り、外国人元配偶者とトラブルになることがある。こういった問題の取り扱いを定めたハーグ条約の加盟論議が盛んなのはご存知の通り。国によって結婚・離婚に対する考え方や法律は異なるから、摩擦が生じるのは避けられない現実だ。

身近な知り合いにも国際結婚と離婚の経験者は少なくない。周りを見渡すと日独国際結婚が破綻する割合は他の結婚同様、5割程度といったところか。

在独15年、小学生の子供が2人いる知人の日本人女性の場合はこうだった。性格の不一致によりドイツ人と別かれ裁判所で親権を争ったが、相手方は彼女を「悪い母」に仕立て上げるためありとあらゆることを誇大に申し立て、結局、親権は男性側に認められた。

その話を聞いて私が直感的に思ったのは、外国人の彼女が不利な戦いを強いられたであろうこと。裁判の際、外国人も当然ドイツ語で争わなければならない。彼女は流暢なドイツ語を話し傍らに弁護士がいたとはいえ、母国語か否かは決定的な差だ。また裁判官の心情としてドイツの血が流れる子供の親権をドイツ人に渡したいという意識は働かなかったか。単なる憶測に過ぎないが、いずれにしてもドイツは決して2人にとって中立公正の地ではない。

彼女を含めた離婚経験者が未経験者に贈る教えが2つある。ひとつは「離婚には結婚した時の3倍のエネルギーが必要」。もうひとつは「離婚すると訴訟費用で銀行口座がカラになる」という話。離婚訴訟では互いに弁護士を立て3年ほど裁判を続けなければならない。制度上そうなっているため仕方ないとはいえ「まるで弁護士に稼がせるため離婚したようなもの」という恨み節をよく聞く。

結婚感だけでなく恋愛感も日独でだいぶ違っている。ドイツをよく知る日本人は「ドイツ人女性は母である前に女性として生きている」と分析する。たとえ家庭と子供があっても新たな恋愛が始まれば男に走り、もちろん相手の家庭

など知ったことではない。逆に男性なら「父である前に男」となる。あくまで傾向の問題だが「家庭・子供」と「恋愛」を天秤にかけたとき、日本人より恋愛を選択する人は確かに多い。これは何よりもまず自分を大切にする感覚の現われであり、好意的に書けば「自立した個」、ありていに書けば「はた迷惑なエゴ」。前述とは別の日本人女性はドイツ人の旦那にこう言われ絶句したそうだ。「今度の誕生パーティーに、昔の彼女とその母親を招待するからよろしく」。

正式な結婚だけでなく事実婚も含めれば離婚率はドイツの方がはるかに高い。よって、離婚した親を持つ子供の割合も高くなる。これも聞いた話だが、都会の小学校ともなれば離婚家庭が多く「お前の親はまだ離婚してないのか!」と、実の両親を持つ児童の方がからかわれるとか。これはあながち冗談ではない。

ここまで離婚が普通になると、こんどは周囲がその子供を哀れむ感覚も希薄になる。哀れみはえてして陰湿な感情を生み、問題に蓋をする傾向が強まるから、率直にいった誰の役にもたたない。それより問題を客観的に受け止め、子供のサポートに関心を向ける方がよほど有意義だ。日本とは違った感覚であるが、ドイツ流の考え方をすればそういうことになる。

(在独ジャーナリスト 松田 雅央)



教会で執り行われた結婚式。誓いを立ててもおよそ半数が離婚の結末を迎える